
ライムライト

小野寺シュークリーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライムライト

【Nコード】

N4842I

【作者名】

小野寺シュークリーム

【あらすじ】

主人公は親友に裏切られて刑務所に入れられてしまったあわれな少年。そして出所した頃には家族も何もかも全て失い、これから先の希望はまず無かった。そんな時訪ねてきた一人の少女によって、彼は過去に戻ることを決意する。全ては人生をやり直すために。

第一話

九月二十五日。僕は刑務所を出所して自宅に帰った。

十年前、親友が犯してしまった罪の隠蔽の片棒を担いでしまった。親友のその泣きつくような必死の願い、我ながら人が良すぎると思いつつもその頼みを請け負い、共犯の徒となってしまうた。しかしやはり今の時代の警察はそう見くびれるものでもなく、もの数日後にはあつという間に僕たちのところへと辿り着いた。ところがこの親友、もう事件を隠すことができないと思うや否や、その罪の一切を全て僕へと押し付けた。友の策中にまんまと嵌められたのか、現場からはそれと思しき証拠が次々と発見された。僕はすぐに犯行の否認をした。事後の隠滅は共にしたが、犯行そのものは自分ではないと。しかし上辺だけの言葉よりもその根拠を重要視するこの時世、僕の反発もむなしく結局僕は刑務所へと入れられた。

檻の中で僕は、一人失意の日々を過ごしていた。最初のうちは超越されていた、家族からの手紙も日に日に少なくなっていく、やがて途絶えてしまった。手紙の内容は、僕自身が犯罪者のレッテルを貼られ、家族もまたそれで傷ついているということ、そして家族自身は僕のことをいつまでも信じ、待ち続けるということだった。僕はそれを読んで読んで何度か読み返して、言えぬ思いで胸が詰まりそうになった。そうした日々が積むに積まれた今日この日、僕は自宅へと戻ってきたのだ。

家には誰も居なかった。それはみんながどこかへ出掛けている、ということではなく。あの長い長い時間は、いろんなものを失うのには十分な時間だった。父も母も、病気で亡くなってしまったということを面会の時間、数少ない知人から聞かされた。手紙の数が減り、途絶えたのもそのためだった。僕は頭の中で、母が病魔に冒されながらも手紙を書き続ける様子を思い浮かべた。そして僕はそれを思いながら、もう誰もいない居間で一人虚無感に酔いしれていた。

そんな中、インターホンの音が静寂な空間に鳴り響いた。僕は玄関の方へと向かった。ドアを開けると、そこには一人の少女が立っていた。身長などから見て高校生くらいに見えた。

「こんにちは、久しぶりね。私のこと覚えてる？」

彼女はそう言った。僕は何か、記憶の中につつかえるようなものを覚えた。この人、見覚えがある。確か、確かあの時。僕は一つの記憶を取り出した。

「確か君は、小学生の頃まで一緒にいた…」僕がそう言うと、
「ようやく思い出したみたいね。」

僕の予想は的中した。

「本当に久しぶりだな。けれどたしかお前、小学生のときにずいぶん遠くに引越したんじゃないっけか？」

「あなたが警察にパクられたって聞いて、こっちのほうにすっ飛んできたのよ。」

「そのわりには、僕のほうに面会に来なかったよな。」

「ムシヨの中で話す気にはなれないから…」彼女はそう言って俯いた。

「私はここに、あなたを助けにきたのよ。」

「助けに？」

僕は思わずその言葉に反応した。

「だって、あなたこの先、どう生活していくか迷う、迷っているんですよ。だから私が、何とかしてあげようと思ったの。」

「助けるって、どうするつもりなんだよ。」僕は彼女にやや強い声で尋ねた。もう家族も何もない僕を、彼女はどうやって救うつもりなのだろう。僕は気になって仕方がなかった。彼女はただ、自信ありげに言った。

「過去に戻って人生をやり直すのよ。」

彼女の後についていった僕は、気がつけばやたらとコードが繋がれた椅子に座らされていた。

過去に戻るということは、タイムスリップでもするのだろうか。

タイムスリップで思い浮かべるいろいろなこと。ドラえもんのタイムマシン。戦国自衛隊。バクトウザフューチャー。『時をかける少女』のタイムリープ。

「けれど今回あなたには時代もあなた自身も遡ってもらおうわ。」
彼女はそう言っ僕にベルトを手際よくくりつけていく。

「それにしてもあんな簡単に信じてくれるとは思わなかったわ。馬鹿馬鹿しいとか、そんなこと言われるかと思っただけど。」

「君が意味もなく馬鹿馬鹿しいこと言わないってことは、昔から知ってるからな。それに…」

「それに？」

「どうせ他にすることがなかったし、何より夢があるじゃないか、過去にもどるなんて。」

「こんな変な機械に座らされて、よくそんなことが言えるわね。」

「まあね。」

僕はいいながら彼女の方を見る。それにしても若い。自分と同年代の人とはとても思えなかった。

「君ってさ、あれから随分経ったのにあんまり変わらないね。」

「それは…まあ、自分なりの若さの秘訣を守ってるって言うか…」

「ふ〜ん。」

僕はそれ以上聞かなかった。彼女の表情にもっと気を配れば、あるいは気づけたかもしれない。

「さあ、準備出来たわよ。」彼女は赤いボタンみたいなものの前に立った。

「ちなみにこれ、記憶とかも遡ることになるのか？」

「う〜ん、知らない。」

「知らないんか。まあいいや。」

「それじゃ、行くよ。」

「分かった。」

彼女はそのスイッチを押した。

「じゃ、頑張つてね。」

「何をだよ。じゃあな。」

荒々しい轟音と共に、あたりが眩しくなり始めた。それがしばらく続いた後、

僕の

僕の記憶は途絶えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4842i/>

ライムライト

2010年10月28日04時22分発行